

## 吉田松陰その② 思いを伝えるということ

吉田松陰は生涯で三度の罪を犯している。最初は下田港に停泊中の黒船に乗船し、国外密航を企てた罪、二度目は藩の許可なく藩を出、東北地方の視察に行った脱藩の罪、そして死罪となった老中間部詮勝襲撃計画である。松下村塾で塾生に接していた穏やかで思いやるあふれる人柄とは違い、松陰は、吉田という姓の吉を二と十と口に、田を十と口に分け、自らを二十一回猛士と名乗っている。間部詮勝襲撃計画については、松陰の身を案じ、今はその時ではないと自重を促す久坂や高杉を獄中から罵り、高杉に対しては「我は忠義をなすつもり、君は功業をなすつもり」と攻撃し絶縁状を届けている。

松陰は、日米修好通商条約締結の翌年、安政6年に刑死している。安政の大獄という討幕運動の発火点で亡くなったとも言える。松陰の遺志を継いだ久坂は、『草莽堀起論』を展開。藩を越えた有志による決起を唱え、多くの脱藩者が討幕運動に加わった。また、下関海峡で外国船に対する攘夷を決行した。そして、長州藩の失地回復をねらった蛤御門の変で戦死している。

高杉は、奇兵隊の創設、四国連合艦隊下関砲撃の講和などで活躍した。第一次長州征伐の後、長州藩の存続のため幕府に恭順し奇兵隊などの諸隊を解散するとした長州藩保守派を相手に功山寺挙兵を起こした。功山寺挙兵は回天義挙とも呼ばれ、以後長州藩は武力討幕の動きを加速させていく。そして、第二次長州征伐（四境戦争）の最中、小倉口の指揮を執っていた高杉は、結核により病死する。

伊藤は、イギリス留学直後に四国連合艦隊下関砲撃のニュースを聞き、井上聞多とともに急遽帰国し、西欧の武力の強大さを伝えて開戦を回避しようとした。功山寺挙兵では、奇兵隊の山県有朋が挙兵を躊躇するなか、50名の力士隊とともに高杉に呼応し挙兵した。維新後、明治政府の中心人物となり、大日本帝国憲法を制定し国会を開設した。

松陰は、山鹿流兵学師範として、我が国の国防を憂慮し、押し寄せる西欧列強から我が国の独立を守ることを訴え続けた。その遺志を久坂、高杉、伊藤らの松下村塾党が受け継ぎ、後にアジア諸国に対して計り知れない被害をもたらしたことを忘れてはならないが、日本の独立を守る結果となった。

松陰が松下村塾で指導した時は28歳で、高杉は19歳、久坂は18歳、伊藤は17歳である。当時一級の知識と最先端の情報に基づいた松陰の指導は、松陰を師と仰ぐ若い塾生たちに感電するかのようになり、塾生たちの生き方の規準（スケール）となった。亡くなった後も同様であったことも、教師 松陰の素晴らしさだと思う。

わたしの思いや考えが若い先生たちにどれだけ伝わり、かれらの行動規範となるかと問われると甚だおぼつかない。自分の不明さと無能さを恥じるばかりだ。ただ、若い人に期待してこうした便しを書いている。